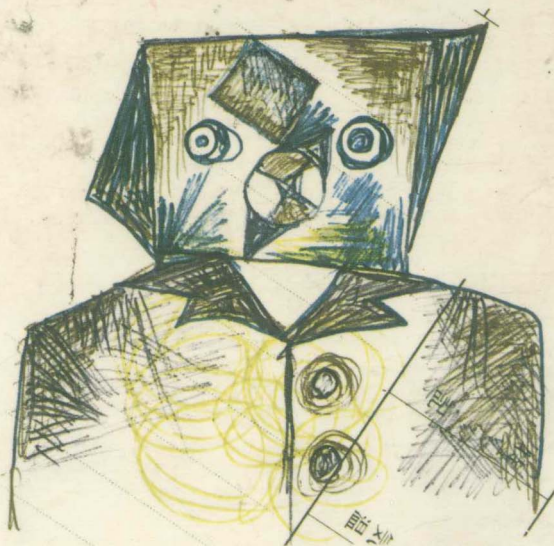


極楽島ただいま満員

久保田二郎



J. UEKUSA



晶文社

極楽島ただいま満員

一九七六年二月一〇日印刷

一九七六年二月一五日発行

著者久保田二郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五局四五〇一(代表・四五〇三)編集

振替東京六一六二七九九

壮光舎印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©1976, Jiro Kubota

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

極楽島ただいま満員

久保田
三郎



晶文社

極楽島ただいま満員 目次

史上最大の兵隊ごっこ

9

いざ行け！ 代々木原頭へ 輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々、蜻蛉も鳥のうち

連合艦隊はコロンの匂い

春宵刻聖林メリケンジャップ物語

51

ああはるやはるハリウッド
僕は最近タイム・マシンに乗ったんだよ

フランク徳永氏とカタキン連隊長殿

フランク徳永氏、新婦

朝綺談

ハリウッドモーションピクチャーオンステージ
聖林活動大写真舞台実演之巻

『ギングング』と『にんじん』とどりの饅頭

78

わが家の映画談義

『お熱いのがお好き』

アス・タイム・ゴース・バイ
月日と共に

僕は喜劇が大好き

109

ジエリー・ルイス弁護論

コメディアンたるべき肉体的条件

ユダヤ人のコメディ・センスに注目し

よう コメディーを見て大笑いする女には注意しましょう

僕は「ジャズ喫茶」や「映画試写」にいったことがない

146

ジャズ喫茶で、自分の性行為を見られてるような気がするんだ

ジャズ喫茶女給哀史

ジャズに詳しい

奴に注意しろ 僕は「映画試写会」にいかない

翔べ!! 甚号、ニューヨークの空へ

171

植草甚一の肩書きは何?

ウエックロジ
植草字考

甚一氏の驚くべき挿話と教訓

甚一号出発

拝啓、ジャズ関係者ならびにファン御同様

196

ジャズ亡国論

対談 五〇年代ノスタルジーとは何か

あとがき、あるいは昭和五十年誘惑日記

233

史上最大の兵隊ごっこ

僕の本籍地は東京都渋谷区千駄谷三丁目五二七番地だ。もともとは、香川県三豊郡栗井村字出晴アサデというところ、父親がこの本籍地を変更してしまったのだ。理由は、香川県が本籍だと、東京生れの僕が、兵隊に取られるときは香川県の連隊に入らなければならぬ。つまり日本陸軍最強連隊の一つであった、丸亀連隊だ。これは大変に死亡率、つまり戦死する率が高い勇猛連隊なので、あぶない。千駄谷なら、入隊するのも、東京近衛第一か、第三連隊ぐらいで、とにかく天皇直属で名譽ばかりやたらと高いけど、ずっと危険率がない連隊とよんだわけだろう。

なにせ、ウチのおやじは日露戦役前、当時東京で、後に明治天皇に爆裂弾をなげかける計画をねっていたアナキスト、幸徳秋水の弟子だったのだが、日露の戦いが始まるや、本籍の香川県からお召しにあずかり、後に修身教科書をかざった、"市太郎やあーい、テッポーあげろー"で有名な市太郎と同村、共に多度津の港から軍用船で満州へ、気がついたら、丸亀連隊の過半数は戦死していたという

のだから、「これは大変、最愛の我が子（コレ僕ノコト）に戦死されては」と思って、せめてものことと、本籍地を変更したのであらん。

千駄谷の僕の家はもちろん今はない。もちろんというのは、昭和二十年の五月の空襲で、焼けてしまったからだ。この家は大体、五稜郭の戦いで有名な榎本武揚の屋敷だったもの、武家づくりで大クラシック、大オーバーな家だった。なにせ、部屋かずも、三十ぐらいあるし、車庫の横には一戸建ての運転手用の家もあるし、入口にたたずめば、どうしても、「タノモー」といい、答える方も「ドーレ」といって出てきたくなる表門と表玄関、その横にあるこれも一戸建ての供待部屋（御主君をはこんで来たお供どもがお待ちする部屋だ）だって二十畳じきくらいはある。

後年つくった西洋館づくりの体育館も庭の築山のうしろにあるし、便所は四ヶ所、庭先で下級のもの、謁見するお白洲まがいの階段が畳廊下からつづいている。

とにかく、半年に一回も行くか、行かないかという部屋が家中に二つや三つはあったのだからデカイことはデカかった。

田舎の親戚の子供達が来て、かくれんぼしたら、行方不明になって、五人いた女中と、書生、運転手など総勢八、九名が手わけして、家中をさがすことになり、なにしろ、三時間かかって、迷子を発見したてんだから、考えて見ると大きかったんだね。

場所は今でもある、千駄谷の鳩森八幡の裏手の一郭全部をしめている。

当時は鳩森八幡宮も、鬱蒼たる樹木に覆われた極めて閑静な八幡様であった。それに、大体、千駄

谷というところは、その頃東京の中でも、麴町、青山なぞとならぶ、一流の高級住宅地であった。

千駄谷にくらべれば、その頃、自由ヶ丘とか、田園調布、成城なんぞ、二流、三流のたかだか文化住宅地にしかすぎなかった。

それに千駄谷に住んでいる住人達がすごかった。

まず国電千駄谷駅は今でも同じところ、ここをおいて、左手にある現在の東京都体育館、これが徳川家十七代、家達公爵^{いよさぎ}のお屋敷、その道路へだてた前が、当時、親英米派の外務大臣として知られ、後に戦後内閣総理大臣になった幣原喜重郎男爵、その裏手、今の津田スクール・オブ・ビジネスあたりは鷹司侯爵家、駅前の大通りをまっすぐきて、鳩森八幡につきあたって、その裏手が、アノ、レイノ、僕ノウチ。その横手に原田日記で有名な原田熊男男爵、その先が、現皇后陛下の親戚、二荒伯爵家^{ふたはら}、僕ンチの裏手が京都の公卿さんの若王子子爵家^{にやんぷうじ}、その先が外相としてベルリンまでのりこんでヒットラー、ムッソリーニと日独伊防共協定を結んで来た松岡外務大臣、その先が総理大臣もやった陸軍大將林銑十郎。その他、モロモロのVIPどもがゴロゴロしていたのが当時の千駄谷であった。

僕の小学校は、当時青山の大通りからチョット引込んだところ、今のユアーズの裏手あたりにあった青山師範附属小学校だった。この小学校は、今は東横線にある学芸大学附属となっている。

当時から大変なスーパード・ユリート小学校でももちろん入試あり、黒白の碁石でたし算、引き算のテストがあったのをおぼえている。

四年生、五年生になる時、四十五名からなるクラスの中から、三、四名ぐらいずつ自然消滅して行ってしまう。つまり春やすみや、夏やすみが終って、教室に再び全員あつまると、友達が、二、三人

ずつ消されてしまつて、いなくなつてゐる。

これはできの悪い子であつて、退学勧告をうけて、他の小学校に編入になつてしまふのだ、つまりクビだね。

そのかわり、もう附屬を目指して、日夜研鑽をつんで待ち焦がれていた他校の級長クラスの秀才兒どもが、ドツと補欠入試になだれをうって、やつて来る。その中から、二、三人を入れるわけだが、マア、他校じゃ開校以来の秀才かもしれないが、附屬に來たら、大体中から下の方にしか成績はランクされなかつたようだ。そのくらいよくデキた子供集団だつた。

四十五名中、ほとんど全員師範OBのエリート先生達が一名ずつ家庭教師についてゐる。もちろん僕のウチにも、師範出の中年の先生で大森第ナン小学校だつたかの人が学校から指名配屬されて、週に三回ぐらい來て毎回三時間ぐらいしめあげてくれたもんだ。

教室じゃ、国語、地理、歴史、算数、その他各課目、全部それぞれの担当先生がゐる。他の小学校じゃ一人の担任がなんでもかでも教えてしまふらしいけど、この小学校は、中学校なみに、各課目によつて、その都度、登場してくる先生が違つてくる。そして、教室の一番うしろには左右一名ずつ師範出たての、つまりインターンの若いのが二名がっちりとすわりこんで教室実技をまなんでんだからもう言うことはないヨ。つまりわれわれは日本一といわれた師範学校附屬のモルモット実験児童集団であつたワケだ。

よくハナシに聞いた懲罰というのがある。遅れて來た子供を立たせるとか、騒いだ子供にバケツをもたしてどうしたとか、先生になぐられたとか、ツネられたとか、この小学校にかぎつて、そういう

た懲罰はなかった。

ただそのかわり、完全無視という、考えようによっては、もっと心理的に陰險な懲罰があった。

それはどういう事かという、もう遅れて来る子や、私語をかわす子はもちろん、大体クラスであまり出来ない子、つまり成績も四十五人中三十番以下の子には、先生は徹底的に無視の態度をとるのである。いくら「ハイ、ハイ」といって手をあげても、けして指名^{サッ}してくれない。「これ解るか？」とか「これできるか？」などといって、「ダレダレやってみろ」と教壇にあげてその問題を解かしてくれたりはいしない。休み時間に、先生が雑談の中に入って来たとしても、けっして話しかけてはくれない。子供の方から、「ネエ、先生……」と話しかけても、ブンとそっぽを向いて、他の子とはなしをする。第一、教室でも廊下でも、どこでも、できの悪い子には先生が目線を合わせることもしてくれないのだから、どうにも徹底した無視振りである。

つまりデキる子しか相手にしない小学校なのだ。デキない子は、もうほうり出して、デキる子だけ、ソレ行ケ、ヤレ行ケ、と徹底的に英才教育をほどこして、日本一の小学校の名声と実績をいやが上にも高めようというのだから、全く我々愛らしきモルモットちゃん達には非人道的な小学校だったワケだ。

いざ行け！ 代々木原頭へ

あの頃、といつても、もうえらく昔のハナシになってしまふが、つまり戦前のことなのだが、僕らの遊び場は三つあった。

まず第一がもちろん、家の前にある、鳩森八幡様だ。今は境内に安っぽい幼稚園やなんかができちやつて、えらくゴミゴミした、いやな八幡様に変つてしまつたが、昔は、たしかに見上げるような巨木がうっそうと繁つた、きわめて閑静な、よい八幡様だった。

これが一番身近かな遊び場であり、次が御存知神宮外苑である。

ここだけは、もうほとんど變つたという印象がない。それはもちろん、東京オリンピックを境にして、国立競技場も、水泳場も、すぐく立派になつたけど、その他、神宮絵画館、神宮野球場はもちろん、相かわらず左まわりの一方通行の循環道路も青山通りに向つてずーっと一本のびてる長い並木路も、その他の樹々も、これは一つも變つたという気がしない。

これは、おそらく、当時として、非常によく出来た庭園設計であつた証拠だし、また、その後幾年、決してコマーシャルイズムを受け入れることがなかつたその方針によるものであらう。

東京で一番變つてないところといつたら、恐らく僕はここをナンバー・ワンにあげたい。もちろん

明治神宮の外苑、つまり外側の一般に公開された公園というような、なり立ちからいって、これは当然のことかもしれないが、今でも、車の交通の少ない明け方なんか、酔眼朦朧として、この外苑を通過する時は、やおら過ぎし小生御幼少の砌りをそぞろ回顧するや、しばしである。

さて、三番目は、これは少々遠出になるのだが、明治神宮の横手一パイに広大なスペースを一人占めしていた代々木練兵場だ。

国電代々木駅のちょっと先から、原宿駅を過ぎ渋谷駅にいたらんとする一線と、小田急線新宿駅よりほどなく南新宿駅より参宮橋、代々木八幡駅にいたる一線にかこまれたほぼ長三角形の地区が、その代々木練兵場である。

この空間、木もなければ、草もなし、川もなければ、山もなし、ただただ平坦な大平地、わずか遠くかすむ、はじっこに禿松三本が（これはいろいろと目標物の目やすとして利用されたのだが）ヒョロと立ってるだけの、全く、東京の下真中に黄塵吹きすさぶ満州の原野がこつぜんと出現したようなものであった。

ここは、東京の中心部にあったので、大学や中学の軍事教練にも時々使われていたが、なんといっても、近所にちらばっている、近衛連隊の演習地として作られたものであり、中隊編成や大隊編成の大型の演習に大いに使われていたのだ。

まあ、全国的になんといっても有名になるのは毎年三月十日の陸軍記念日の大観兵式のときなのだ。そのパレードの話は、後ほどにして、ここが僕ら千駄谷グループの一大集合地だった。

そこで一体なにをやるかというと、これはもう「兵隊ごっこ」一本である。